

底本（十卷本真詮）	中島孤島訳
却説悟空剿了魔王奪了大刀逐日操演武藝教小猴砍竹為標削木為刀安營下寨頑耍多時忽然想道我等在此恐作要成真或驚動人王或有禽王獸王說我操兵造反興師前來相殺此等竹竿木刀如何對敵須得鋒利劍戟方可如今奈何	悟空は混世魔王を退治した後、魔王から分捕った大刀を揮って一心に武藝を練り、小猴等にも竹竿や、木刀の類を授けて、山中を堅めさせましたが、或日衆くの猴の集まった處で、悟空は一同に向つて、相談をかけました。 『我們は斯うして毎日武藝を習つて、敵を防ぐ用意を怠らないが、いざといふ場合に、竹竿や木刀では物の役には立たないであらう。何とかしてよい武器を手に入れる工夫はないか？』
忽有四個老猴上前稟道大王若要鋒利器械甚易我們這山向東去二百里水面乃是傲來國城中軍民無數必有銅鐵匠作大王若去那里或買或造些兵器教演我等守護山場誠所謂長久之計也	すると集まった猴の中から、四匹の老猴が進み出て、 『大王、それは容易いことゝ存じます。』といふ。『此處から東に向つて二百里の海路を越えると傲來國の都城へ参ります、城中には必ず鍛冶屋もありませうから命じて兵器を造らせ、それで以て此の山を守護するのが、所謂長久の計でありませう。』
悟空大喜即縱筋斗雲霎時間過了二百里水面果見有座城池	悟空は大に喜んで、即座に筋斗雲を起し、東に向つて二百里の海上を飛び越えると果して一つの都城の上へ來ました。
悟空想這里定有現成兵器我今使個神通覓他幾件倒好	悟空は雲の上から此の都城の繁華な光景を眺めながら考へるには、『これは鍛冶屋に命じて新しく造らせるよりも、武庫に蓄へてある武器を借りて行く方が早いやうだ、一つ神通力を出して要るだけの武器を借りて行かう。』斯う思案をして、
他就捻訣念咒向巽地上吸一口氣吹將去便是一陣狂風飛沙走石風起處驚散了傲來國王人人閉戶閉門不敢出走	口の中に咒文を唱へて、深く吸ひ込んだ氣息を長く吹き出すと、忽ち一陣の狂風が吹き起つて、石を飛ばし、砂を捲いて荒れ狂ふので、城内の人々は驚いて門を閉め、家の中へ籠居つて息を凝らして居りました。
悟空按下雲頭徑至武庫中打開門扇一看裡面十八般兵器件件俱備悟空大喜暗想我一人能拿幾何還使個分身法搬將去罷即拔一把毫毛嚼爛噴去念咒叫變變做千百個小猴搬箇罄淨徑踏雲頭弄個攝法帶領小猴俱回本處	悟空は天上から往來に人影が絶えたのを見て、悠々と雲を降り、武庫の前へ行つて、門扉を開けて中を覗くと、様々の武器が一杯に並んでゐるので、大に喜んで、直に分身の法を使ひ、一把の毛を抜いて、口中で噛み砕いてふつと噴くと、忽ち千匹の小猴と變じ、手に手に武器を持つて庫の外に搬び出しました。悟空は再び雲を呼び、小猴等と一緒に武器をも載せて花果山へ引返すと、
悟空按落雲頭將身一抖收了毫毛兵器都堆在山前就叫衆猴來領兵器衆猴聞言都去搶刀奪鎗扯弓扳弩耍了一日	雲から降りて、小猴を元の毛に戻し、持還った武器を山中の猴に分けて、花果山を守らせました。
次日依舊排營會集羣猴計有四萬七千餘口驚動了滿山怪獸各樣妖王共有七十二洞都來參拜悟空為尊每年獻貢四時點卯	此の時集まった猴の數は四萬七千餘匹に達し、其の騒ぎが花果山をも震動させるばかりでしたから、全山の獸も残らず洞を出て悟空の臣屬になりました。
悟空連日操	此の日から悟空は、衆猴を相手にして、武藝の練習に精を出して居ましたが、
一日對衆道汝等弓弩熟諳兵器精通	一日水簾洞の中で左右の猴に向つて言ふには、

奈我這口刀不遂我意奈何	『お前達も大分稽古が積んだやうだが、俺はもう熟々此の刀が嫌になった!何か俺の手に合ふやうな武器は無いものかなア?』
四老猴奏道大王乃是仙聖凡兵是不堪用但不知大王水裡可能去得悟空道我有七十二般變化那里去不得四猴道大王既有此神通我這鐵板橋下水通東海大王若肯下去尋著老龍王問他要件兵器却不趣心	例の四個の老猴は、之を聞いて『如何にも大王のお用ひになるには、これは餘り平凡です。』と言つて暫時考へて居たが、『では一つ龍王の宮城を訪ねて、何か所望して見たら何うでせう?幸ひ此橋の下の水は直に東海に通つて居るのですから。』
悟空大喜即跳至橋頭使個閉水法鑽入波中分開水路徑入東洋海底	『それは面白い!』と悟空は膝を拍つて起つと、直に鐵橋の所へ行つて、閉水の法を使つて波の底へ鑽り入り、程なく東海の底へ出て見ると、
忽見一個巡海的夜叉攔生問道你是何神聖說個明白好通報迎接	海底を警戒する巡海夜叉の一人が忽ち見咎めて、『其處へ來るのは何者か?名をお名乗りなさい!』
悟空道吾乃花果山天生聖人孫悟空為何不識	『花果山天生聖人孫悟空』と悟空が名乗りをあげるのを聞いて、
夜叉聽說急轉水晶宮報與東海龍王知道	夜叉は急いで水晶宮の門を入れて行つたが、
龍王赦廣即忙出宮迎接入宮叙坐獻茶畢	程なく龍王は自身に宮城を出て悟空を迎へ、先に立つて宮中へ案内しました。
問道上仙到敝宮有何分付	『さて今日御來下すつた御用向きは?』と龍王が尋ねる。
悟空道因吾教演兒孫守護山洞奈無兵器久聞賢鄰享樂瑤宮有多神器特來告求一件龍王不好推辭	『近頃眷屬共に武藝を習はせて、山を守護させようと思ひつきました。肝腎の武器がない。貴君の庫には澤山にあると聞いて、實は御無心に上つたのです。』 と悟空が答へるのを聞いて、
即著鯁都司取出桿刀奉上悟空道老孫不會用刀乞另賜一件	龍王は直に臣下に命じて一振の大刀を運び出させた。 『我輩には刀は使へない!』と言つて、悟空は手にも執らない。
龍王又着鮎太尉鱧力士抬出一桿九股叉來重三千六百觔悟空跳下來接在手中使了一路放下道輕輕不趣手再另賜一件	龍王は又臣下に命じて、重さ三千六百斤の九股叉を出させて、悟空の前に置くと、悟空は手に執つて一振り振つたが、『こんな軽いものは手に合はない!』といつて抛り出した。
龍王恐懼又着鯁提督鯉總兵抬出方天戟重七千二百觔悟空接在手中丟幾個架子插在中間道也還輕輕可再尋一件來	龍王は又臣下に命じて、七千二百斤の方天戟を出すと、悟空は手に執つて振り廻して見たが、『これも軽い!』といつて其處へ置いた。『もつと重い武器がありさうなものだ。』
龍王一發害怕再沒甚麼兵器	龍王は内心氣味が悪くなつて、『重い武器と申してもう他にはありません、
忽後面閃過龍婆龍女道大王觀看此聖決非小可	
我們這海藏中那一塊天河定底的神珍鐵這幾日霞光艷艷莫是該出現遇此聖也龍王道此是大禹治水之時定	ただ海藏の中に、其の昔夏の大禹が水を治めた時に、海の深淺を搜つたといふ鐵の棒があります。それならばお役に立つかも知れません。』

海淺深的定子是一塊神鐵能中何用	
龍婆道莫管他用不用且送與他憑他 怎麼改造送出宮門便了	
龍王依言向悟空說了悟空道你引我去 龍王果引至海藏	と言ひながら、悟空を海藏へ案内しました。悟空は海藏へ入つて
忽見金光萬道龍王指道那放光的便是 悟空上前摸了一把乃是鐵柱子有斗來粗 二丈餘長	見ると、長さ二丈餘りで、一面に金色の光を放つて居る <b>一本の棒がある</b> 。 『今の棒といふのはこれです』。と龍王が指さして言ふ。
他儘力兩手撾過道忒粗忒長些再短 細些方可用	悟空は兩手を棒にかけながら、『これは太過ぎる、長過ぎる!』と言ふと、
說畢那寶貝就短了幾尺細了一圍 悟空又顛一顛道再細些更好那寶貝又 細了幾分	<b>不思議なるかな!</b> 棒は見る間に縮んで丁度 <b>手頃の棒</b> になりました。
悟空拿出海藏一看原來兩頭是兩箇 金箍中間乃一段烏鐵鑄着一行字喚 做如意金箍棒重一萬三千五百斤心中 暗喜遂弄起神通丟開解數打	悟空は棒を提げて海藏の外へ出て、よくよく見ると、棒の兩端には金の箍がはまつて、其の間に「如意金箍棒重さ一萬三千五百斤」といふ一行の文字を鑄着けてある。悟空は心の中に喜んで、
轉水晶宮說得龍王胆戰心驚悟空將 寶貝執在手中坐于殿上對龍王笑道 多謝賢鄰厚意今我身上無衣甲你備 一副送我一總奉謝	水晶宮に歸り、さて龍王に向つて言ふには、 『これで武器は手に入ったが、甲がなくてはいけない。序にそれも拜領したい』。
龍王道這箇却是沒有	<b>龍王は此の面倒なお客を早く逐歸したいと思つて</b> 、『生憎甲は持合せがないから』といつて <b>謝絶</b> つたが、
悟空道一客不犯二主若沒有我也定 不出此門	悟空は <b>どうしても承知しないで</b> 、『甲がなければ何時までも此處を動かない』と言つて、
龍王道委的沒有如有即當奉承	
悟空道真箇沒有就和你試試此鐵	如意棒をも揮ひかねない様子を見せるので
龍王慌了道二仙切莫動手待我着舍 弟處可有當送一副	龍王もほとほと持餘して、『それでは弟達を呼んで相談して見ますから、暫時の間お待ち下さい』。と悟空を言ひ宥めて置いて、
悟空道令弟何在龍王道舍弟乃南海 龍王敖欽北海龍王敖順西海龍王敖 閻是也悟空道我不去我不去只望你 送我一副便了龍王道不須上仙去我 這里有一面鐵鼓一口金鐘凡有緊急 事鼓响鐘鳴舍弟頃刻就至悟空道既 如此快去	
播鼓撞鐘真箇鼓响鐘鳴驚動那三海 龍王須臾一齊來到	鐵鼓を叩き、金鐘を鳴らして、南海、北海、西海の三龍王を呼んで
敖欽道大哥有甚緊事播鼓撞鐘敖廣 道因早間花果山有一個甚麼天生聖 人來拜我要一件兵器獻鋼叉嫌小奉 面戟嫌輕將一塊天河定底神珍鐵自	<b>談合</b> すると、

己拿出如今坐在宮中又要索披掛我處沒有故請賢弟來你們可有披掛送他一副打發他去罷了敖欽聞言大怒道待我點兵拿他敖問道二哥不必與他動手	
且湊副披掛與他打發他去寫表啟奏上天天自誅他	『まづ今日は望みの物を與へて逐拂つて置いて、後で上帝に上奏けて天罰を加へることにするがよからう』といふことになった。
敖順道說的是我這裡有一双步雲履敖問道我有一副鎖子黃金甲敖欽道我有一頂鳳翅紫金冠	其處で北海龍王は步雲履、西海龍王は鎖子黃金甲、南海龍王は鳳翅紫金冠を出して悟空に與へたので、
敖廣大喜引入水晶宮相見以此奉上悟空將金冠金甲雲履穿戴停當使動如意棒一路打出去對衆龍王道聒噪聒噪四海龍王甚是不平遂商議進表上奏不題	悟空はやうやう満足して、龍宮城を立去りました。
却說悟空分開水道徑回鐵板橋頭攔將上去只見衆猴都在橋邊忽見悟空跳出波外身上無一點水濕金燦燦的走上橋來衆猴一齊跪下道大王好華綵耶	悟空は再び水を潜つて水簾洞へ歸り、波の中から跳上ると、小猴等は忽ち身邊へ集まつて來て、暫くは金の胄を着、金の冠を戴いた大王の姿を珍しさうに見て居たが、
悟空滿面春風將鐵棒豎在當中衆猴不知好歹都來拿那寶貝却似蜻蜓撼石柱分毫不能動	其内に悟空の置いた鐵の棒へ目を付けて、寄つて集つて持上げようとするが、まるで地から生えたやうに、分毫も動かないので、
個個伸舌道這般重大王怎麼就拿來	一同は呆れ果てて、口々に『大王はこんな重い物をどうして持つて來たのだらう?』と言つて、不思議さうに悟空の顔を見上げました。
悟空將前事說了一遍遂叫衆猴站開等我	悟空は小猴等の様子を笑つて見て居たが、いきなり鐵棒へ手を掛けて、
叫他變一變看即將寶貝執在手中叫小小即時就小如綉花針藏在耳朵內	『小さくなれ! 小さくなれ!』といふと、棒は次第に縮まつて、終ひには綉花針程になる。それを摘まんで耳の中へ藏したが、
衆猴駭然道大王還拿出來耍耍	
悟空又去耳朵裡拿出放在掌上叫大大即又大如斗長二丈餘	又取出して掌上へ載せて、『大きくなれ!大きくなれ!』といふと、針はだんだん伸びて、二丈餘りの棒になつた。
悟空遂跳出洞外將寶貝摺在手中使一个法天像地的神通把腰一躬叫声長他就身高萬丈頭如泰山腰如峻嶺根如閃電口似城門禾如劍戟說得七十二洞妖王叩頭禮拜霎時收了法像將寶貝還變做綉花針藏在耳內復歸洞府將四个老猴封為健將將安管賞罰諸事都付他維持遂放心	悟空は驚き呆れる衆猴に向つて、如意棒の由來を語り、伸ばす時は天地を貫き、縮まれば綉花針となつて耳の中に藏れる此の棒の奇特を説いたので、一同は手を拍つて感嘆するばかりでした。 如意棒を手に入れてから、悟空は最早天下に恐れるものはないといふ心持になつて、
騰雲駕霧遨遊四海廣交賢友此時有	毎日雲に騰つて天下を周遊り、四方の仙人と交際を結びまし

牛魔王蛟魔王鵬魔王獅狒王彌猴王 猓狻王日日往來飲酒無限快樂	た。
一日在本洞請六王赴飲吃得大醉送 六王回去	或日五六人の親友を招いて、水簾洞で酒宴を催したが、客の 歸った後、
倒在鐵板橋邊松陰之下睡着忽見兩 人拏一張批文上有孫悟空三字走近 身不容分說套上繩就把悟空的魂兒 索了去直帶到一座城邊悟空酒醒抬 頭看那城上有一牌牌上寫幽冥界三 字	悟空は橋の傍の松樹の根元へ酔ひ倒れて、前後も知らずに睡 つてしまひました。すると忽ち二個の人が現はれて、無理無 體に悟空を把へて、索を掛けて、一つの城の前へ連れて行く。 悟空は酒の酔ひも醒め果て、頭を擡げて城の上を見ると、 一つの牌に『幽冥界』の三字が現はれて居る。
悟空道幽冥界乃閻王所居我為何到 此	『幽冥界といへば閻王の居る所ではないか？』と悟空は兩人 に尋ねた。『俺は何で此處へ來たのか？』
那兩人道你今陽壽該終我兩人領批 勾你來也	『お前は壽命が盡きたので、今此處へ連れて來たのだ』と兩 人が答へる。
悟空道我老孫超出三界之外已不伏 他管轄怎麼敢來勾我	『俺は三界の外に超脱して、最早閻王の管轄を受ける身分で はないぞ！俺をこんな處へ連れて來るとは何だ！』
那兩人只管要拖他進去	と云つて悟空は兩人を睨みつけたが、兩人は黙つて悟空を引 いたまゝ、城門を入らうとするので、
悟空大怒遂在耳朵中取出寶貝幌一 幌碗來粗細把兩個打為肉醬自解其 索輪著棒打入城中	悟空は火のやうに怒つて、耳朵の中から如意棒を取出すや否 や、手頃の長さに伸ばして、只一打に兩人の者を打殺し、鐵 棒を水車の如く振廻して城中へ暴れ込んだ。
號得那牛頭馬面東奔西走衆鬼卒奔 上森羅殿報着大王禍事禍事外面一 个毛臉雷公打將來了	閻王の城中では、悟空が恐ろしい勢で跳込んで來たのを見る と、彼の牛頭馬頭を始め、數多の鬼共は、吃驚して彼方此方 へ逃げ廻り、森羅殿へ駆け込んで、大王に此の由を注進する。
慌得十殿冥王急急來看見他兇惡即 高叫道上仙留名	十大冥王は急いで此の場へ來て見ると、一人の男が棒を振つ て暴れ廻つてゐるので、呼び留めて名を尋ねる。
悟空道我是花果山水簾洞天生聖人 孫悟空	『俺は花果山水簾洞天生聖人孫悟空といひ、
你等是什麼官位快報名來免打十王 道我等是秦廣王楚江王宋帝王五官 王閻羅王平等王泰山王都市王卞城 王轉輪王	
悟空道汝等既登王位為何不知好歹 我老孫修仙了道與天齊壽超昇三界 跳出五行為何着人拘我	仙道を修行して、天と壽を齊しくし、既に三界を超越した者 だ。』といつたが、『何の爲に俺を此處へ呼び寄せたのか？』 と恐ろしい見幕で詰寄るので、
十王道上仙息怒普天下同名同姓者 多敢是那勾死人錯了	十王は先づ悟空を宥めて、『これは必ず人違ひに相違ない、』 と言譯する。『廣い世界には同姓同名の者も澤山にある筈だか ら。』
悟空道胡說你快取生死簿子來看	『それならば生死の帳簿を出して見せよ。』と尙も悟空が迫る ので、
十王聞言即請悟空登森羅殿南面坐 下命掌案判官取出文簿來逐一查看	十王は餘儀なく悟空を森羅殿へ案内し、掛りの役人を呼び出 して生死の名簿を取出させた。悟空は手に取つて見て行くう ちに、

<p>並無他名又看到猴屬之類直到魂字一千三百五十號上方注着孫悟空名字乃天產石猴該壽三百四十二歲善終悟空就取筆過來把猴屬有名者一概勾了摔下簿子道了帳了帳今不伏你管了一路棒打出幽冥界</p>	<p>猴屬といふ部に、『孫悟空、天産の石猴、壽三百四十二歳、善終』とあるのが目に付いたので、直ぐに筆を取って抹殺し、其の他猴屬の中でも名の有る者は残らず棒を引いてしまった後、帳簿を投出して、『これでよしよし、もうお前達の厄介にはならんよ』と言ひ棄て、如意棒を振廻しながら幽冥界を出た。</p>
<p>那十王不敢相近都去翠雲宮同拜地藏王菩薩商量啟表奏聞上天不題這猴王打出城中被草絆倒</p>	
<p>忽然驚醒乃是南柯一夢四健將與衆猴高叫道大王吃了多少酒睡這一夜還不醒來悟空就把夢中所為說了一遍如个汝等皆不伏他所轄也衆猴磕頭礼謝自此山猴多有不死者以陰司無名故也</p>	<p>と思ふと、忽ち眼が醒めて、悟空は矢張松樹の下に睡つて居たのでした。けれども夢の間の出来事を考へて見ると、悟空には何うしても夢とは思はれなかった。悟空が松樹の下に睡つて居る間に、魂は眞實に幽冥界へ下つて、生死の名簿を抹殺して來たのでした。</p> <p>今日に至るまで猴の類が長命なのは、此の時冥界の帳簿から名を除かれた爲めだと言傳へられて居ます。</p>
<p>却說玉皇上帝一日駕坐靈霄殿文武仙卿入朝忽有東海龍王敖廣及冥司秦廣王進表齊至俱稱花果山水簾洞妖猴孫悟空逞惡行兇甚為難制乞遣天兵收此妖孽</p>	<p>一日玉皇上帝は、天上の靈番殿で諸臣の上奏を聽いて居られた時、東海龍王と十大冥王が同時に表を上つて、花果山水簾洞の妖猴孫悟空の暴行を訴へて出た。</p>
<p>玉皇覽表即着敖廣回東海秦廣王歸地府</p>	<p>上帝は其の表を取つて御覽になると、龍王は悟空が龍宮城を騒がして、無體に武器、甲冑の類を奪ひ歸つた所業を憤り、又冥王は悟空が森羅殿に闖入して生死の名簿を抹殺した振舞ひを憎んで、速に天兵を下して、彼れの罪を糺したまへと、まるで申し合はせたやうに、同じことを願ふのでした。</p>
<p>朕即遣將擒拿二人頓首謝去玉皇問衆仙卿曰這妖猴是何時產育何代出身却就這般有道千里眼順風耳奏道這猴乃三百年前天産石猴當時不以為然不知這幾年在何方修煉成仙降龍伏虎強銷死籍也玉帝道那路神將下界收伏</p>	<p>斯う二人まで同じことを訴へて出る以上は、早速軍勢を向けて、此奴を征伐しなくてはなるまい、といふので、上帝は此の事を群臣に尋ねられると、</p>
<p>言未已班中閃出太白長庚星奏曰上聖三界中凡有九竅者皆可修仙此猴乃天地育成之體他既修成仙道與人何異臣啟陛下可念生化之慈恩降一道招安聖旨把他宣來上界授他一个官職拘束此間他若違天命就此擒拿一則不動衆勞師二則收仙有道也</p>	<p>一座の中から太白星が進み出て、意見を述べる。</p> <p>『此の猴は天地を父母として生れ、神仙の道を修めましたからは、最早獸の類ではありません。願はくば天恩を下して、彼れを天上界へ召上し、官職を授けて、此處に抑留きまして、萬一勅命に背いた節に、引捕へて刑罰に行はれませうなれば、一つには軍勢を差向ける手數も省け、二つには神仙を遇する道にも叶ひ、所謂一擧兩くき得の策でありませう。』</p>
<p>玉帝依奏即着太白金星招安</p>	<p>上帝は喜んで此意見を採用され、直ぐに太白星を天使として悟空に勅命を傳へさせました。</p>
<p>金星領旨出南天門外按下祥雲直至</p>	<p>太白星は勅命を受けて、南天門を出ると、雲に騰つて花果山</p>

花果山	に降り、
對小猴道我乃天使有聖旨在此請你 大王上界快快報知小猴聞言忙入洞 報知悟空悟空出洞迎接	
金星徑入當中立定道我是太白金星 奉玉帝招安聖旨下界請你上天拜受 仙籙悟空大喜就令安排筵宴款待金 星道聖旨在身不敢久留就請同往悟 空即令四健將謹慎教演兒孫遂與金 星縱起雲頭昇在空霄之上	悟空に向つて上帝の聖旨を傳へたので、悟空は喜んでお請を しました。其處で留守中の事をかの四個の老猴に託んで、悟 空は太白星と同伴つて天上界に上り、
畢竟不知授甚麼官爵且聽下回分解	